

栄子にとって、今年の夏はいつもより暑く、いつもより長く感じられた。

例年なら旧盆をはさんでの半月を千葉の海沿いにある守の実家で過ごすのだったが、今年は墓参りを済ませたあと一泊しただけで帰ってきた。その代わり信州にある栄子の実家に立ち寄り、直哉を十日ほど預かってもらうことにした。両親や兄弟夫婦は栄子たちの元気な姿を見て安心したようだったし、夏休みくらいは自然の中で遊ばしたほうがいいと言ってくれたのは義姉だった。

栄子は管理人としてなるべくあかつき荘を留守た。最高気温を次々に更新して、ついにここ数年では珍しい三十六度四分を記録した日の午後だった。

「栄子さん、毎日暑いわね。この暑さ、いつたいいつまで続くのかしら」

玄関に打ち水をしているとき、志津が声をかけてきた。

日曜日で店が休みのためか、今日の志津は洋服を着て、長い髪を上ので一つに束ねている。ワインカラーのTシャツに細めのジーンズ姿に驚いて、栄子は思わず大きな声を出してしまった。

「矢島さんって和服も洋服も似合うんですね。そのTシャツの色、素敵だわ」

にしたくなかった。表立った仕事がなくとも管理人がいるのといないのでは住人の心構えが違うと言った源造の言葉が心に残っているからだった。

直哉がいなくなった部屋の中で、栄子は暑さと長い時間を持て余していた。

窓を開ければ周りのビルから日照りが入り込んできて、せまい部屋は蒸し風呂のような状態になる。夜になっても居座っている熱気のためにクーラーのスイッチを切ることができない。せめて直哉だけでも涼しい田舎に残してきてよかったと栄子は思っていた。

「ありがとう。本当はこんな格好で外に出るのは恥ずかしいんだけど、この暑さじゃ仕方ないわ。ところで、直哉君の姿が見えないようだけど、どうしたの」

直哉を可愛がってくれる志津は辺りを見渡して不思議そうにしている。

「私の実家に預けているんです。同じ年頃の従兄弟がいるものですから」

「それじゃ、栄子さん寂しいでしょう」

「ええ、静かになった反面気が抜けてしまって」

「ちようどよかったわ。西瓜をいただいたんだけど一人で食べ切れなくて困っていたところなの。いっしょに来て食べるのを手伝ってくれない」

「でも……」

戸惑っている栄子を、志津は強引に二階に連れ
ていってしまった。

西瓜を半分ほど食べ終わったとき、志津が
何気なく源造のことを口にした。

「源造さんはその後どうなの。もう元気になった
のかしら」

「だいぶ顔色も良くなって、元気そうになりました
よ。暑いから外には出られないけど、家の中で
はもう普通に動いています」

「そう、よかったわ」

志津はほっとしたように笑顔を見せた。

源造から志津のことを聞いてからは、二人の

過去をそっとしておこうと思っていた栄子だった。

しかし、志津のほうから源造のことを聞かれて
再び迷い出した。

志津も不安だったに違いない。だからこそ栄子
を部屋に誘って源造の病状を聞き出したのだ
ろう。源造から聞いた話を、その志津に伝えよう
と決心した。

「矢島さん、私、伯父さんからお二人のことを聞
かせてもらいました」

源造がどのような口調で志津のことを語った
かを栄子はくわしく話して聞かせた。

志津は黙って聞いていた。そして、聞き終わっ
た後でポツンと言った。

「私、本当は源造さんがこの建物を処分するつ
て言い出すのを待っていたの。そのときには
心残りなくここを出ていけると思ったから」

「伯父さんは矢島さんが出て行ってから取り壊

そうと思っていたんじゃないでしょうか」

「そうかもしれないわね」

志津の頬がかすかに上気している。

片思いの相手から思わず愛を告白された少女
のように初々しい表情が志津の気持ちを表し
ていた。志津はまだ源造を愛している。栄子はそ
う確信して言葉が続けた。

「伯父さんが矢島さんをどう思っていたか分かり
ました。でも、矢島さんは奥さんも子供もいる

「こんな話まだ誰にもしたことがないので。で
も、この世で一人くらい私の気持ちを知っていて
くれる人がいてもいいかもしれないわね。もう

昔話だもの」

栄子を振り返ってそう言ったあと、志津は再び
遠い空へと視線を移した。そして、一つ一つ言葉
を選ぶように語り出した。

志津が源造と知り合ったのは、隣の不動産
会社に勤めていたときだった。源造が五十歳、

志津が二十歳になってまもなくのことである。

静岡の富士市で生まれ育った志津は地元じもとの商業しょうぎょう 高校こうこうを優秀ゆうしゅうな成績せいせきで卒業そつぎょうし、学校がっこうの推薦すいせんでその会社かいしゃに就職しゅうしょくした。仕事しごとに慣れた二年目にねんめには経理けいりの主な仕事しごとを任せられるほど会社側かいしがわから信頼しんらいされていた。

仕事の関係かんけいでこの不動産会社ふせうさんがいしゃに入社でいりしていた源造げんぞうは、志津しづのてきばきした仕事しごとぶりにまず目を付け、そのうちに年のわりには落ち着いた物腰ものこしや年配ねんばいの男性だんせいたちに混じって堂々どうどうと自分の意見いけんをいう度胸どきょうの良さが気にいって志津しづに声をかけた。きた。

「わしの店を手伝ってくれないか」

志津しづにとって初めて体験たいけんする夜の世界よるせかいである。

自分じぶんとたいして年の変わらぬ女おんなたちが高価こうかな服ふくや装身具そうしんぐを身につけて生き生きと働はたらいている光景こうけいに目を見張り、一日五時間程度いちにちごごみせ店みせに出るだけで月に五十万ごじゅうまんもの収入しゅうにゅうになるといふ話はなしに腰こしを抜ぬかすほど驚おどろいた。

その頃ころ、志津しづは給料きゅうりようのほとんどを家いえに送おくっていた。父ちちを腎不全じんふぜんで亡なくしたあとの母ははと二人ふたりの弟おとうとの家計かけいを助けるために自分じぶんから言い出いしたことである。残のこったわずかな金額きんがくの中で細々ほそぼそと暮くらしている志津しづは、殺風景さつふうけいな部屋へやでおしゃれにも無縁むえんな毎日まいにちを送おくっていた。

源造げんぞうの話はなしが本当ほんとうだとすると、スナックのママ

地下ちかの喫茶店きっさてんに呼び出よされての第一声だいいっせいがこれだった。

源造げんぞうの言葉ことばを借りて言うならば、志津しづには自分じぶんでは気付きづいていない女おんなとしての魅力みりょくがあった。笑わらうと両頬りょうほおにくつきりと刻きざまれる笑えくぼや、スリムな体からだのわりには豊かな胸むねと腰こしが男おとこの目を引きつける武器ぶきになっていた。物怯ものおじしない性格せいかくも水商売みずしょうばいにぴったりである。

初めはじは源造げんぞうの話はなしを取り合あわなかった。しかし、会社かいしゃの上客じょうきやくである以上いじょうあまり無下むげにすることできない。同僚どうりょうといっしょならという条件じょうけんで何度なんどか源造げんぞうの誘さそいに応おうじているうちに志津しづの気持きもちが変かわっていった。

になれば家いえに今いままで以上いじょうの送金そうきんができ、弟おとうとも大学だいがくに進学しんがくできる。そして、自分じぶんのためのお金かねも十分過じゅうぶんずぎるほど残のこる。

志津しづは源造げんぞうから誘さそわれてから半年後はんんとしごに会社かいしゃを辞やめた。お金かねのためではないと言いいながらも、結局けつぎは人並ひとなみの暮くらしたいという誘惑ゆうわくに勝かてなかったのである。

源造げんぞうはその頃ころ、三軒さんけんの店みせをもっていた。喫茶店きっさてんが二軒にけんとスナックが一軒いっけんである。その中なかの一つ「スナック・蘭らん」に志津しづは見習みならいホステスとして入はいった。雇やとわれママは三十歳さんじゅうさいくらいで、夫おつともバーテンとして店みせに出でている。将来しょうらいは二人ふたりで店みせを持つもつことを目標もくひょうにして働はたらいている真面目まじめな

夫婦だった。

志津は「蘭」で水商売がどういうものかを知った。端から見れば楽な仕事に見えても、実際はきくばと体力が必要な厳しい仕事である。深夜まで店を開けていても、翌朝は早くから新鮮な魚や野菜の買い出しに行く。開店前の仕込みも大切な仕事だ。

ママが持ち歩いている手帳には客の誕生日から冠婚葬祭のすべてが記入されていることにも驚かされた。開店の準備に取りかかる前にも手帳を開いて、しばらく顔を見せない客に電話を入れたり葉書を書いたりするのを日課にしている。そのために、二年前から書道を習っている。

で応えた。その大らかな表情に父親のような愛を感じて、志津は胸を熱くしたものである。

「スナック・葵」を開店すると同時に、志津は源造の勧めであかつき荘の一室に越してきた。通うのに便利なためと、経営状態の報告をしやすいためであった。

そして、まもなく二人は結ばれた。

(以上12月2日放送分)

るのよと稽古の成果を見せてくれた。

一度つかんだ客を手放さないことが客商売を成功さす秘訣だと、志津はママから教わった。半年間、「蘭」で働いた後、志津は「スナック・葵」のママになった。

源造が新しく建てたビルの二階で、店の内装から食器選びまで志津の好みを優先させた明るくスマートな店である。輸入物の建材や備品を使ったために内装費にかなりの超過が出てしまった。

「志津がやっていく店だ。これくらいすぐ取り返せるさ」

請求書を見て驚いている志津に、源造は笑顔